平成9年度厚生省心身障害研究

「我が国の小児保健医療体制の在り方に関する研究」

小児科入局者数の変動と入局後の動向に関する調査研究

（分担研究：小児医療供給体制に関する研究）

白木和夫*、小池通夫、河野三郎、大西鐘壽、武内可尚、西田勝、柳澤正義

【要約】

1983年から1995年にいたる13年間の、全国小児科入局者数の年度別変動を調査した。全体としてみると年度毎の入局者数は前半の7年間に比べ、後半6年間では10％減少していた。特に男性の入局者が著明に減少し、前半に比べ13％の減少であった。これに対し女性の年度毎の入局者数はむしろ増加し、前半7年間に比し後半6年間では20％増加していた。特に最近の3年間の女性入局者数の増加が著しく、これが全体としての減少傾向を弱める効果となっている。この結果、小児科入局者に中の女性の占める割合は、調査対象の13年間の初めの3年間と最後の3年間とを比べるとほぼ倍増している。国公私立大学別にみると、全体としての入局者数に大きな年度別変動はないが、これは男性の入局者減を女性の入局者増で補っている結果である。これに対して私立大学では男性の入局者減が著明で、しかも女性の入局者増がそれほどでないので、全体としての入局者減が著しかった。

【見出し語】小児科、入局者数、年度別、男女別

少子化傾向の影響その他の理由から、近年、小児科入局者が減少しているといわれるがその実態は明らかでない。そこでその程度を明らかにして今後の対策の資料とするために、最近の13年間にわたる小児科入局者数の変動を調査した（1）。

［方法］1983年から1995年までの13年間にわたって、日本小児科学会に入会した医師数の、卒業年度別、男女別、入局大学の国公私立別の変動を調査した。なお研修届けを入局後しばらくしてから提出したため、入会年度が入局年度と一致しない場合は入局年度に統一して集計した。

［結果］この13年間に小児科に入局した医師の総数は5,721名であった。これらの内訳は表1に示すごとくである。

1.全入局者数の年度別変動

13年間での1年あたり平均小児科入局者総数は

* 鳥取大学医学部小児科学教室

Department of Pediatircs, Tottori University

439名であった。前半の7年間では年435名から480名で、1年を除き平均値を上回った入局者があったが、後半の6年間では1年を除き平均値を下回っていた。最も入局者が少なかったのは1992年の378名であった。前半7年間の入局者数は年平均460名であったのに対し、後半の6年間では年平均414名で、10％減であった。

ただしもう少し細かくみると、1990年から1992年に至る3年間は平均393名（−15％）と落ち込みが著しく、その後1993年から1995年に至る3年間では平均434名とやや回復しているが、これは1993年の入局者数が463名と突出しているためでその後はまた減少している。

2.男女別入局者数の年度別変動

小児科入局者数の年度別変動には明らかな男女差が認められた。全体としてみると男性では年度を追うごとに入局者数が減少しているが、女性ではむしろ増加傾向が認められた。

男性の小児科入局者数は前半の7年間では年平均289名であったが、後半の6年間では年平均252名（−13％）で、全体としてみたときより更に減少が著しかった。特に最近3年間の平均入局者数は247名で、10年前の1983年から1985年の3年間の平均入局者数340名に比べ27％減となっていた。

これに対して女性の小児科入局者数は前半7年間の平均137名に対して、後半6年間では平均163名で、20％増加している。特に最近3年間の平均入局者数は188名で、10年前の1983年から1985年の3年間の平均入局者数126名と比べると実に49％増となっている。この女性入局者数の増加が男性入局者数の減少を補っているのが、全体としての入局者減少が最近3年間やや鈍っている理由である。

男性入局者が減少し、女性入局者が増加した結果、小児科入局者の中に占める女性の率が年々急速に高くなっている。1983年から1985年の入局者中の女性の割合は平均27.0％であったが、10年後の1993年から1995年の3年間の女性入局者の占める割合は平均43.3％となった。

3.国公私立大学別小児科入局者数の年度別変動

1）国立大学

国立大学入局者数は13年間で3,198名で、全体の55.9％を占めていた。その年度別入局者数は、この13年間全く変動がなく、年平均246名であった。

しかしながら男女別にみると、男性では1983年から1993年まで軽度の減少傾向を示し、その後の1994年と1995年の2年間に著しく減少している。これに対して女性の入局者数は1983年には56名であったが、徐々に増加し、特に1993年以降の3年間では平均109名と10年前に比べ2倍に増えている。この女性入局者の増加が男性の入局減を補って、全体としての入局者数がほぼ一定している理由である。この結果、国立大学小児科入局者の中に占める女性の割合は1983年から1985年の3年間では平均19.3％であったものが、10年後の1993年から1995年の3年間では平均42.8％にまで上昇した。

2）公立大学

13年間の小児科入局者総数は668名で全体の12％であった。国立大学と同様に13年間の年度別の入局者数にはほとんど変動がなかったが、やはり女性の増加傾向が認められた。1983年から1985年の3年間における女性入局者の占める割合は平均30.6％であったのに対して、10年後の1993年から1995年の3年間の平均は35.4％とやや高くなっていたが、その上昇率は国立大学ほど大きくなかった。

3）私立大学

13年間の入局者総数は1,844名で、全体の32.2％であった。年度別入局者数には、国立・公立大学と異なり、著明な減少が認められた。前半7年間の入局者数が平均159名であったのに対して、後半6年間の入局者数は平均122名で23％の減少であった。特に男性入局者の減少が著明で、前半7年間の平均が106名であったのに対し、後半6年間では平均67名

で、減少率は37％と大きかった。これに対して女性入局者の増加は僅かであったが、男性入局者の減少が著しいためその率は上昇していた。1983年から1985年の3年間の入局者中に占める女性の割合は平均は32.0％であったが、10年後の1993年から1995年の3年間では平均47.2％にまで上昇していた。

［考察］

本調査の結果、我が国における小児科入局者が近年、減少傾向を示していることが明らかになった。また男性の入局者が著明に減少しているのに対し、女性はむしろ増加しており、この結果、女性入局者の比率が近年著明に上昇していることが明らかとなった。

私立大学小児科入局が少ない最大の理由として、私立大学の小児科研修医のアルバイトを含む収入が少ないために、私立大学を卒業して小児科に入局するものの大部分が、国立大学に流れているためと考えられている。

今後、小児科医の減少と共に女性の入局比率が上昇するものと推測される。小児科医の中の女性医師の比率が増すことは、小児救急、NICUなど時間外勤務の多い小児医療を維持する上に、多くの問題を生じる恐れがあり、速やかに小児科入局者の増加をはかると共に、女性小児科医が勤務を継続できるような環境整備を行うことが急務である。

文献

1）小児科医志望者の最近の動向．日本小児科学会雑誌　1998；101：1636-1638.

表１　小児科入局者動向

（ ）：女性の率　％

年度	国立			公立			私立			全体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
83	171	56 (14.7)	227	41	16 (28.1)	57	115	53 (31.6)	168	328	126 (27.8)	454
84	201	64 (24.2)	265	25	16 (39.0)	41	117	57 (32.8)	174	343	137 (28.5)	480
85	189	47 (19.1)	236	46	15 (24.6)	61	114	53 (31.7)	167	349	115 (24.8)	464
86	188	74 (28.2)	262	46	12 (20.7)	58	103	53 (34.0)	156	337	139 (29.2)	476
87	171	78 (31.3)	249	29	19 (39.6)	48	92	58 (38.7)	150	292	155 (34.7)	447
88	162	67 (29.3)	229	39	24 (38.1)	63	95	46 (32.6)	141	297	138 (31.7)	435
89	175	78 (30.8)	253	36	22 (37.9)	58	106	50 (32.1)	156	317	150 (32.1)	467
90	170	61 (26.4)	231	28	15 (34.9)	43	71	51 (41.8)	122	269	128 (32.2)	397
91	163	83 (33.7)	246	29	16 (35.6)	45	66	47 (41.6)	113	258	147 (36.3)	405
92	161	69 (30.0)	230	17	19 (52.8)	36	63	48 (43.2)	111	242	136 (36.0)	378
93	165	116 (41.3)	281	33	14 (29.8)	47	74	59 (44.4)	133	272	191 (41.3)	463
94	127	118 (48.2)	245	38	21 (35.6)	59	63	60 (48.8)	123	229	199 (46.5)	428
95	147	94 (39.0)	241	26	18 (40.9)	44	66	62 (48.4)	128	239	174 (42.1)	413
合計	2,190	1,005 (31.5)	3,195	433	227 (34.4)	660	1,145	697 (37.8)	1,842	3,772	1,935 (33.9)	5,707

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【要約】
1983 年から 1995 年にいたる 13 年間の、全国小児科入局者数の年度別変動を調査した。全体としてみると年度毎の入局者数は前半の 7 年間に比べ、後半 6 年間では 10%減少していた。特に男性の入局者が著明に減少し、前半に比べ 13%の減少であった。これに対し女性の年度毎の入局者数はむしろ増加し、前半 7 年間に比し後半 6 年間では 20%増加していた。特に最近の 3 年間の女性入局者数の増加が著しく、これが全体としての減少傾向を弱める効果となっている。この結果、小児科入局者に中の女性の占める割合は、調査対象の 13 年間の初めの 3 年間と最後の 3 年間とを比べるとほぼ倍増している。国公私立大学別にみると、全体としての入局者数に大きな年度別変動はないが、これは男性の入局者減を女性の入局者増で補っている結果である。これに対して私立大学では男性の入局者減が著明で、しかも女性の入局者増がそれほどでないので、全体としての入局者減が著しかった。